

	No.46 平成 17 年(2005 年)12 月 15 日発行 北海道・マサチューセッツ協会 会長 森本 正夫
Hokkaido/Massachusetts Society 北海道・マサチューセッツ協会 会報	発行所 〒060-0003 札幌市中央区北 3 条西 7 丁目 道庁別館 12 階 TEL011-231-3392 FAX 011-231-3666 発行人 中 垣 正 史 E-mail:homas@siren.ocn.ne.jp

北海道開拓の基礎を築いた指導者たち④

多くの製造実験を行ったペンハロー(札幌農学校第 3 代教頭)と 北海道農法の基礎を築いたブルックス(札幌農学校の第 4 代教頭)

明治 9 年(1876) 3 月 3 日、マサチューセッツ州立農科大学長クラーク博士は、ワシントンにおいて 1 年間の雇用契約(年俸 7200 ドル)を結び、来日を決めました。同年 6 月 1 日、サンフランシスコをグレートリパブリック号で出発、6 月 29 日横浜到着。東京滞在後、7 月 25 日品川沖から開拓使御用船「玄武丸」に乗り、7 月 30 日午前 10 時 30 分小樽に到着。午後 3 時小樽上陸、一泊して 7 月 31 日早朝小樽を馬に乗って出発、午前 10 時 40 分札幌に到着したのです。ウィリアム・S・クラーク博士(1826-1886、当時 50 歳の誕生日)と優秀な教え子のウィリアム・ホイーラー(1851-1932、当時 25 歳)、デヴィッド・P・ペンハロー(1854-1910、当時 22 歳)の一行 3 人はこうして札幌入りしたのです。ホイーラーは、明治 10 年(1877) 4 月 16 日クラーク博士離札後、教頭代理となりますが、明治 12 年(1879) 12 月帰国しています。その後、ペンハローが教頭代理となりますが、明治 13 年(1880) 8 月妻の病気のため帰国(4 年 3 ヶ月滞在)。少し遅れて明治 10 年(1877) 2 月に来札していたウィリアム・P・ブルックス(1851-1938、当時 26 歳)は、その後札幌で 2 人の子ども(道産子)も生まれ、10 年 7 ヶ月余の札幌滞在となります。このブルックスが、明治 13 年(1880) 8 月、ペンハローのあとを引き継いで第 4 代の教頭代理となっています。(また、明治 11 年(1878) 9 月には、ジョン・C・カッター(1851-1909) が来札、8 年 4 ヶ月滞在していますが、カッターについては「HOMAS」47 号で詳述します。)

「札幌農学校」は、明治 9 年 8 月 14 日開拓使の調所広文を校長とし、クラーク、ホイーラー、ペンハローを教師陣として、本科生 24 人、予科生 26 人、合計 50 人の学生を迎えて開校しました。(これは、東大農学部(駒場農学校)の開校よりも 1 年半早く、日本最初の高等農学校といわれます。) 初代教頭クラーク博士の敬虔な信仰心と高邁な理想による建学の思想と第 2 代教頭のウィリアム・ホイーラー(年俸 3,000 ドル)の人格的教育的感化力の偉大については、「HOMAS」45 号に詳述しましたので、今回は、デヴィット・P・ペンハロー(年俸 2,500 ドル)とウィリアム・P・ブルックス(年俸 2,500 ドル)の業績について取り上げてみたいと思います。

ペンハローは、ホイーラーよりも 3 歳年下で、1854 年 5 月 25 日メイン州キタリー・ポイント生れ。マ州立農科大学出身(3 期生)で、明治 9 年(1876) 7 月、クラーク博士・ホイーラーとともに札幌農学校に着任しています。植物学・化学・英語を担当しました。明治 13 年(1880) 8 月までの約 4 年間在任しました。

彼は、自ら設計した化学実験室で繊維、農産物、鉱石、土壌などの成分分析や石鹸、ローソク、マッチ、皮革、コークス、魚油などの製造実験も行っています。農業においてもビート栽培などの研究に功績を残しました。いつもニヤニヤして山羊のようなあごひげをはやしていたところから、「ゴート先生」とあだ名されていました。ペンハローは、また開拓使の求めに応じて化学分析その他で多様な貢献をしています。樹脂製造調査、各地産の鉱物や土質の分析、道産の石油試験、札幌ビールや日本酒の分析、麦芽病源調査など、開拓使は農学校のような

整った化学実験室や専門家をもたなかったことから、全ての化学分析はペンハローに依頼されたようです。

また、学生と植物、昆虫、動物の標本採集などのフィールドワークにも出かけています。この折の資料が、米
国帰国後の学術論文に活用されているといわれます。彼は札幌農学校の仕事には、満足して、自ら進んで契約を
更新し、米国に残してきた妻にも北海道に来るように手紙を出していたといわれます。明治 12 年(1879)12 月ホ
イラーの帰国後は、第 3 代教頭代理となりますが、翌年夏明治 13 年 (1880) 8 月には、妻の病気のため、4
年 3 ヶ月にわたる札幌の生活に終止符を打って帰国することになります。

ペンハローは、帰国後、ニューヨーク州のホートン農業試験場の研究員になりますが、1883 年閉鎖となり、
その後、カナダのモントリオールのマクギル大学の植物学の講師、2 年後に教授に昇進。古生物学の権威として
多くの論文を発表し、後に、アメリカ博物学会・アメリカ果実栽培学会などの会長を務めています。

ペンハローは、日本人の国民性をよく理解し、日本が欧米に比べて決して後進国ではなく、むしろ優れた文化
や技術をもった国であると強調しています。

1907 年 10 月、マ州立農科大学創立 40 周年を記念してクラーク・ホールの落成式がおこなわれたとき、ペン
ハローが、クラーク博士をしのぶスピーチを述べています。主に科学的農業の発達におけるクラークの役割と「高
い理想、たゆまざる努力、揺らぐことのない目的意識」を持つ人として、クラークの日本での活躍に言及して、
「クラーク学長の仕事のなかで、おそらく西欧文明の最善の部分を取り入れようと努力する日本人に協力したこ
とほど、恒久的な印象と影響力を残したものは無い」とその功績を讃えています。クラークの影響力を示す強力
な証拠としてペンハローがあげたものは、札幌農学校の卒業生の活躍だったといわれます。

大学での忙しい仕事をこなしながら、生物試験場の設立に多くの時間と労力を注いだペンハローは健康を害し、
1910 年、大学を休職、そして 10 月 20 日、リヴァプールから静養先のコーンウォールにむかう船上で、帰らぬ
人となりました。享年 56 歳でした。友人は追悼文の中で、「疲れを知らないかのように働き、仕事に情熱を傾け
た人」「なにが正直で正しいかについて強い信念を持ち、表明することを恐れない立派な人格者」そして「日本
国民に熱烈な敬愛の念」を抱いていた人として、ペンハローを偲んだといわれます。

ブルックスは 1851 年 11 月 19 日マ州サウス・シチュエイト村の農家の生れ。11 人兄弟の 10 番目。1875(明
5)年、マ州農科大学 (5 期生) 卒業。クラーク博士の後任として抜擢され、少し遅れて来札。農学と農業実習を
担当しクラーク博士帰国後農園長を兼務しました。そして、北海道の特産品となった丘珠タマネギや暗渠土管の
紹介、とうもろこし、かぼちゃ、燕麦、キャベツ、亜麻、ビート、トマト、コーンなどの導入に努力し、家畜・
農業機械・種子の輸入や土地・気候・肥料などの試験により最適の作物の選定・栽培法の検討も行うなど、学内
外に多大の功績を残しています。また、北海道最初の農業雑誌の発行や最初の農業博覧会(明治 11 年大通り公園)
も彼の提唱によるものでした。明治 13 年 8 月、第 4 代教頭心得となり、契約更新を重ねて、以後 6 年間、札幌
農学校を率いたのです。ブルックスもよく日本人を理解し、相手の視点を理解しようとする寛容さと誠実さを
持って努力した人でした。ブルックス夫妻と二人の子ども(道産子)は、札幌の気候と札幌の人々を愛し、市中散
歩の折には、よく子どもたちに声を掛け、また「ブル先生、ブル先生」と呼ばれ、人気が高かったといわれます。

明治 21 年(1888)、10 年余の札幌滞在の後、帰国しました。翌年母校マ州立農科大学の教授となり、また、大
学付属農業試験場の運営にもあたりました。1899 年、ドイツのハレ大学に留学して博士号取得後、再び母校の
教授を務め、一般農民の指導にも力を入れました。かつて、北海道にアメリカの農産物を導入したブルックスは、
逆に日本特有の品種をアメリカに紹介することにも感心を持ち、特に大豆の移植に成功したといわれます。1906
年(明治 39)からは州立の農業試験場長として農業振興に努力しました。

ブルックス家を訪れる人たちは、彼が札幌で過した歳月を象徴するかのようには咲き誇るみごとな庭の桜に見と
れたといわれます。大正 8 年(1919)、日本農学博士、1932 年(昭和 7 年)母校から名誉農学博士を贈られています。
1938 年(昭和 13 年)3 月 8 日死去。享年 86 歳でした。

2005 年マサチューセッツ州訪問団派遣事業の記録(概要)

ー詳細記録・写真等は、「2005 年マ州訪問団報告書」(平成 18 年 3 月発行)に掲載します。ー

2005 年は、北海道・マサチューセッツ州姉妹提携 15 周年の節目にあたり、早くから、訪問団の派遣と記念行事を考えてきました。ボストンの州庁舎における公式行事が中核になるため、北海道知事・北海道議会議長を中心とする代表訪問団の派遣日程(アルバータ州姉妹提携 25 周年、マサチューセッツ州姉妹提携 15 周年)の確定を待つ形となりました。当初は、7 月 4 日インデペンデンスディを視野に入れて、イベントなどを考えていましたが、道議会等公務の関係もあり、9 月か 10 月の中旬ということで期日決定がおくれたこともあって、調整も困難となり道内各団体の訪問団派遣は独自のスケジュールで出発して、ボストンで集結することになりました。

今回は結果的に、YOSAKOI ソーランチーム、お琴尺ハグループの連携も不調に終り、滝川市、七飯町グループもそれぞれ別日程で参加する形となりましたが、道庁(4 名)、道議会(18 名)、北方圏センター(11 名)、マ州協会(7 名)、七飯町(12 名)、滝川市(9 名)、IT ビジネス(6 名)で合計 67 名の 15 周年記念訪問団となりました。

当協会訪問団は平成 17 年(2005 年)10 月 12 日(水)～19 日(水)の 8 日間で、ボストンの公式行事、コンコードのホームステイ交流及びホイーラー墓参、アマーストのマ州立大学公式訪問とクラーク博士墓参、そしてニューヨーク観光という日程で行って参りました。

10 月 13 日(木) ボストン

* ボストン市内観光 (9:00-17:00)

午前は、(トリニティチャーチ)、ビーコンヒル～(ステイトハウス)～ボストンコモンを歩いて見学。次いで MIT、ハーバード大学見学。(COOP でフリータイム)。ー昼食(中華レストラン「スキップジャック」)ー午後、クインシーマーケット～(ポールリビアの家)～ボストン美術館見学。(ボストン美術館秘蔵の名作、ゴーギャンの「我々はどこから来たのか、我々は何者か、我々はどこへ行くのか」との久しぶりの感動的の再会あり)そして夕刻、ステートハウスへ

* 北海道・マサチューセッツ州姉妹提携 15 周年記念式典・レセプション(18:00-20:30)

(ステートハウスグレートホールにて)

(記念式典)	州側挨拶	マ州政府経済開発特別室次官	レネー・フライ氏
	道側挨拶	北海道副知事	吉沢 慶信氏
	来賓挨拶	マ州立大学長	ジャック・ウィルソン氏
	来賓挨拶	在ボストン日本国総領事館首席領事	高島 正幸氏
(レセプション)	乾杯挨拶	道議会議長	高橋 文明氏

この式典・レセプションには、北海道の関係団体訪問団合計 67 名が参加しました。在ボストン日本国総領事館関係者・REX プログラム派遣日本語教師上村理絵氏や元国際交流員などボストン在住の人たちも参加。マサチューセッツ州側は州政府、州立大、マ州北海道協会、ボストン日本協会、コンコード、スプリングフィールドの関係者など約 70 名が出席、日米の参加者合計は約 150 名で、盛大な式典とレセプションが開催されました。会場で多くの人々と挨拶を交わし、お土産「ホーレスケブロンストリート」クッキーを差し上げました。

* 北海道 PR 展・日米学生絵画書道展 <州庁舎エントランスホール 10 月 11 日(土)～21 日(金)>

北海道 PR のポスターと日米学生(マ州側 27 点、北海道側 15 点)の作品が展示されていました。

姉妹交流の発展誓う

マサチューセッツ州と通 提携15周年で式典

【ボストン13日西村卓也】道と米マサチューセッツ州の姉妹提携は十五周年の記念式典が十三日夕(日本時間十四日午前)、ボストンの同州庁舎で開かれ、交流の深まりを祝うとともに、経済、教育、文化など各分野での関係発展を誓い合った。

式典には道側から訪問団長の吉沢慶昌副知事、高橋文明道議会議員らが出席、マサチューセッツ州側からはフライ経済開発局長らが参列した。フライ次長はあいさつで「マサチューセッツからは十八億、(約)千億の対日輸出があり、日本は世界で四番目の輸出国です」と、経済交流の重要性を強調した。

これに対し、吉沢副知事は「十五年といえは人間的な精神的、肉体的に

大きく飛躍する時期、姉妹交流も互いの存在方を生かし、刺激と合って発展させなければならぬ」と述べた。

式典が行われた州庁舎玄関ホールでは、北海道の専攻やボスタ、児童生徒の絵画などを集めた「北海道展」が十一日から展示されている。同州スプリングフィールドと姉妹提携がある滝川市、同州関係者

じくコンコードと提携する競馬管内七飯町の小中学生の絵画や書が飾られ、庁舎を訪れた人々の注目を集めている。

姉妹提携は一九八五年、来道したデューカス州知事夫人(当時)が提案、九〇年に正式調印した。道は他にカナダ・アルバータ州、中国・黒龍江省、ロシア・サハリン州と姉妹友好関係を結んでいる。

記念式典で吉沢副知事(手前右)から記念品を受け取るマサチューセッツ州関係者



平成17年)10月15日(土曜日) (夕刊)

道・米マサチューセッツ州

「交流宣言」に署名

州知事

【ボストン14日西村卓也】道と米マサチューセッツ州の姉妹提携は十五周年を記念する訪問団(副知事・吉沢慶昌副知事)一行は十四日午前(日本時間十四日深夜)、ボストンの州庁舎にロムニー州知事を訪問した。ロムニー知事は交流を多岐なレベルで進めたいとの各分野

【ボストン14日西村卓也】道と米マサチューセッツ州の姉妹提携は十五周年を記念する訪問団(副知事・吉沢慶昌副知事)一行は十四日午前(日本時間十四日深夜)、ボストンの州庁舎にロムニー州知事を訪問した。ロムニー知事は交流を多岐なレベルで進めたいとの各分野

野で交流を積み重ね、両地域の発展と相互利益に貢献してきた」と評価。十五周年を機に「科学技術や経済、観光などの交流が大学や民間といった多様なレベルで促進されることを期待する」と強調する両側。

五周年、十周年の際の交流促進宣言は、両知事がそろってボストンで調印したが、今回は高橋知事が訪米を取りやめたため、民間的な対応でなされた。

ロムニー知事は「市民も州政府も、北海道が日本(の)教育や科学の中心であると認めています。文化の交流が互いの大学や経済活動に有益であることが重要だと述べ、宣言を吉沢副知事に手渡した。吉沢副知事は「私が預かって両知事の署名がそろった状態を維持したい」と受け取った。

10月14日(金) コンコード

コンコードは、13日(木)と14日(金)の2泊のホームステイで、「コンコーディアン」の人達に暖かく迎えられました。13日のボストンも14日のコンコードも、あいにくの雨模様のはっきりしないお天気でしたが、ホストファミリーの車の送迎で充実したスケジュールとなりました。14日は、七飯町グループと合流しました。

* 15周年記念歓迎セレモニー(9:00-10:00)

(コンコード町タウンハウスにて)

(挨拶)	歓迎挨拶	コンコード町セレクトマン	ジュディー・テリー氏
		七飯町海外交流研修訪問団挨拶	村瀬 克巳団長
		北海道マ州協会訪問団挨拶	中垣 正史団長
(ギフト交換)	お土産として「ホーレスケプロンストリート」クッキーを持参しました。		
(出席者)◆コンコード町	セレクトマン	ジュディー・テリー氏	
	タウンマネージャー	クリストファー・ホイーラン氏	
	国際交流担当	スーザン・カーチン氏	
	(通訳)	エミリー・ファーロー氏	
◆北海道側	七飯町訪問団長	村瀬 克巳氏	
	総務担当	岡崎 伸三氏	
	北海道マ州協会理事	中垣 正史氏	
	その他、ホストファミリーの方々と北海道からの訪問団のメンバーが参加しました。		

* コンコード観光(10:00-16:00)

午前は、「若草物語」の作者ルイザ・メイ・オルコットの生家「オーチャードハウス」とコンコードの誇り高い歴史・文化を集約したコンコード美術館見学。(中華レストラン「長安」で昼食)

午後は、札幌農学校第2代教頭ウィリアム・ホイーラーのお墓参り(スリーピーホロー墓地)とアメリカ独立戦争の発火点となったノースブリッジ見学(ミニットマン国立歴史公園)。

* ボトラックパーティー(18:30-20:30) (トリニタリアン・コングリゲイショナル・チャーチにて)

夜は、合同のレセプションで、コンコード側は、国際交流担当スタッフ、ホストファミリー、中・高校生、先生方約60名が、会場の設営や食べ物の準備をして、北海道側の七飯町グループ(中学生)及び、北海道・マサチューセッツ協会グループを歓迎してくれました。それぞれテーブル毎にお互いの自己紹介や挨拶などにぎやかな談笑が続きました。

最後は、七飯町グループが準備したハッピー姿の盆踊りの大きな輪が会場いっぱいになり、すばらしいフィナーレとなりました。

10月15日(土) アマースト・スプリングフィールド

* マサチューセッツ州立大学訪問 (10:15-12:00)

最初に、マ州立大学ビジターセンターで、国際交流担当のローレル・フォスタームアさんの出迎えを受けて、北方圏センターグループ及び滝川市グループと合流しました。雨降りのため、キャンパス見学の予定が大幅に変更になり、フットボールスタジアムは中止になりました。

* クラーク記念庭園見学 (10:30-11:00)

昨年のUMASSから北大へ1年留学していたマシュー・シザーさん、現在北大からUMASSへ留学中の佐藤さん(二人とも同名)の案内で出かけましたが、かなり強い雨降りの中、傘をさしながらの見学でした。

この庭園は、クラーク博士の没後100年を記念して1991年(平成3年)10月完成したもの。キャンパスの小さい丘の上に位置しており、クラーク博士の邸宅跡といわれます。

* マサチューセッツ州立大学歓迎式典(11:00-12:00)

(州立大学図書館エントランスホールにて)

(歓迎式典) UMASS 国際交流プログラム担当課長挨拶 フランク・ヒューガス氏
 UMASS 副学長挨拶 チャーリーナ・セイモア氏
 北海道マ州協会理事事務局長挨拶 中垣 正史氏
 マ州北海道協会会長挨拶 スー・ルート氏
 (通訳) UMASS 学生 マシュー・シザー氏(昨年1年間北大へ留学)
 (ギフト交換) 北海道からは、15周年記念の「ホーレスケブロンストリート」クッキーときのとやクッキー
 「札幌農学校」(クラーク博士を記念したもの)をマ州立大学関係者に差し上げました。

* クラーク博士墓参(13:30-14:00)(ウエストセメタリー)

午後は、幸い雨は小止みとなり、スー・ルート会長の案内で、滝川市グループ代表(前田・山内氏)と一緒にクラーク博士一家のお墓参りをすることができました。スー・ルート会長とともに献花しました。

* 「ヤンキーキャンドル」ファクトリーショッピング(14:00-16:00)

アメリカのみならず世界的に有名なローソク「ヤンキーキャンドル」の本社工場の巨大マーケットでフリータイムとしました。あの馥郁とした香りにつつまれて、何か旅の疲れを癒される感じのひとときでした。

- ・スプリングフィールド市は、はじめての訪問で不安内のため、どこも見学できませんでした。今になって、折角スプリングフィールド市まで行っているながら、バスケットボールの殿堂・歴史博物館・滝川西高の姉妹校スプリングフィールド工科高校などを垣間見ることもできなかったことを残念に思っています。

早目にホテルのチェックインをして、その夕刻、シェラトンホテルの窓から見た久しぶりに晴れ上がった夕焼け空とゆったりと流れるコネチカット川的美しさが今も眼底に残っています。

* スプリングフィールドドレセプション(18:30-20:30)(ドイツレストラン「スチューデントプリンス」にて)

夜は、スー・ルート会長夫妻とキャサリン・ウッズ・マサルスキー夫妻主催の盛大な歓迎ディナーのもてなしを受けました。日米あわせて 20 名の豪華な宴となりました。長年の札幌でのマ州訪問団受け入れ・ファイブカレッジセンター東アジア研究プログラム受け入れの賜物と思い、これも「交流の絆」とうれしく感じました。

10月16日(日)~17日(月) ニューヨーク観光

- * (16日)午後、ニューヨーク市内観光：自由の女神(バッテリー公園にて)、五番街セントラルパークウエストサイド~メトロポリタン美術館など見学。夕刻ニューヨーク「北海道ゆかりの会」竹田代表らと会食。

夜は、ブロードウェイのミュージカル鑑賞など。

- * (17日)終日。フリータイムの1日観光で、国連本部、グランドセントラル駅、セントパトリック大聖堂、ロックフェラセンターなど、思い思いにマンハッタンを歩きまわりました。

10月18日(火)~19日(水) いよいよ帰国

早朝、ラガーディア空港からデトロイト経由で~成田へ。そして羽田空港から新千歳空港へと予定通り全員無事に帰って参りました。

今回のマサチューセッツ州訪問団企画実施には、多くの困難点がありましたが、ボストン、コンコード、アマースト、スプリングフィールド各地において、それぞれに交流を深めることができました。

平成 17 年度第 2 回 国際交流ランチセミナー 記録（抄）

テーマ 「新しい国際交流を求めて～異文化理解のふれあい～」

日 時 平成 17 年 11 月 26 日（土） 11:00～14:00
場 所 KKR ホテル札幌 札幌市中央区北 4 条西 5 丁目
2F レストラン「マイヨール」

ゲスト：

マイケル ヘイズ	（カナダ）	（札幌市教委 ALT）	（M）
チェルシー コンリン	（アメリカ）	（札幌市教委 ALT）	（F）
ジョナサン シェパード	（アメリカ）	（札幌市教委 ALT）	（M）
ニコラス トーセック	（アメリカ）	（札幌市教委 ALT）	（F）
ジェームズ エリック ルーディ	（アメリカ）（UMASS）	（北大留学生）	（M）
ベンジャミン サリバン	（アメリカ）（UMASS）	（北大留学生）	（M）
ジョナサン ウォルシュ	（アメリカ）	（北海道医療大学）	（M）

概要： この国際交流ランチセミナーは、マサチューセッツ州とのつながりに基本理念を置き、2001 年（平成 13 年）から、広く多国籍の北海道在住外国人をゲストとしてお招きして、国際交流や異文化理解の問題を論じていただき、会員同志の意見交換 交流の場にもなることを目指しています。

今回は UMASS からの北大留学生 2 名、札幌市教委 ALT 4 名、北海道医療大学から 1 名、2 カ国から合計 7 名のゲストをお招きしました。各テーブル（～ 2 名）毎にゲストを囲んで、ランチを食べながら、異文化交流の話をしていただき、すばらしい国際交流の時間を共有していただきました。

ここには、紙面の都合上、ゲストのショートスピーチのみをご紹介します。
今回の参加者は合計 45 名。（通訳は、当協会会員 関谷敏子さん）

チェルシー コンリン （アメリカ） 札幌市教委 ALT（女性）

みなさんこんにちは。私はアメリカニューヨーク州出身のチェルシー・コンリンです。1 年 4 ヶ月前に来日しまして、このセミナーには 2 回目の参加です。現在は発寒中学校で英語を教えています。札幌が大好きです。

今日は、私が感じている日本人の印象についてお話させていただきます。最近、友人と回転寿司へ行った時に

いろいろな話をしました。彼女は病院で働いているのですが、近々会社の忘年会があると言いました。彼女の上司はお医者さんですが、宴会がある度に支払いは全てその上司が払ってくれるそうです。また、私の日本人の男性の友人もいつも食事代を払おうとしてくれます。でも、私はそのようなことは好きではありません。アメリカでは、このような支払いの習慣はありませんので、とても不思議に感じています。特別な理由がある場合(何かのお礼など)はアメリカでも支払う時はありますが、ふだんはほとんどありません。日本のように何の理由もなくご馳走してもらおうと、何かお返しをしなければならないのだろうか・・・と悩んでしまいます。いろいろな日本の習慣を理解しようと努力していますが、アメリカで育った私にとっては理解に苦しむ事が多々あります。もし皆さんが外国人にご馳走するような機会がありましたら、一度その相手に、ご馳走しますがいかがですか。というように聞いてみるのも良いのではないのでしょうか。

今日はお招きいただきましてありがとうございました。

ジョナサン ウォルシュ (アメリカ) 北海道医療大学(男性)

私はジョナサン・ウォルシュです。日本食が大好きですので、私にはいつでも食事をご馳走してください。(笑) 現在 41 歳で、20 歳の頃来日して 1 年間上智大学で勉強しました。それから青森・東京・埼玉・京都・四国にも住んだ事があります。1992 年からは札幌に住んでいますが、札幌がとても好きです。また、次のセミナーも参加したいと思っていますので、またいろいろお話ししたいと思います。

今日をご招待いただきまして、本当にありがとうございました。

ニコラス トーセック (アメリカ) 札幌市教委 ALT(男性)

こんにちは。今回 2 回目の参加になりますニコラス・トーセックです。現在 22 歳で、札幌市教委の ALT として来日しまして、現在は、厚別区の中学校で英語を教えています。札幌へ来て 16 ヶ月が過ぎました。

今日はアメリカと日本での仕事とプライベートの考え方の違いについてお話ししたいと思います。現在私は日本人の先生と一緒に働いているのですが、1 週間にすると 45 時間勤務していることになります。しかし、日本の行政は 45 時間以上働く事を無言のうちに期待しているような感じがします。その超過勤務に対する手当は無く、日本では「サービス残業」と呼ばれています。それに加え、早朝・深夜に関わらず子どもについての問題を相談してくる親がいるのです。教師だけではなく、美容師など他の職業でも同様の事が起こっているようです。これは、アメリカでは考えられないことです。

アメリカでは、よほど忙しくない限り「サービス残業」をすることはありません。もし学校で子どもたちに何か問題があれば、先生から親に電話をかけます。また、休日出勤も考えられません。もし、どうしても行かなければならない場合は、その報酬が必ず支払われます。もちろん日本の仕事に対する取り組み方は素晴らしいのですが、問題は「サービス残業」が半ば強制的に行われている事です。

また、日本の学校で使われる教育予算が非常に少ないと思います。特に教師に対する報酬は年々減っています。アメリカでもしそのような事があれば、必ずストライキをやります。ところが、日本の先生達はおとなしく、小さい声でそこそと不満を言っています。大きな行動を起こさないと状況は変わらないと思うので、日本の先生方ももっと積極的にストライキなどを行うべきだと思います。

今日はありがとうございました。

ジェームス ルーディ (アメリカ) UMASS からの北大留学生 (男性)

マサチューセッツ州立大学から日本語とビジネスを学ぶために北大に留学しています。私は、ジェームス・ルーディといいます。

去年の夏、私は姉妹都市プログラムで5週間日本に来る機会がありました。非常に貴重な経験をする事ができ、再び日本に来るきっかけにもなりました。しかし、アメリカに帰ってからは日本語を勉強する機会がなかなか無く、今もまだ苦戦中です。言葉ができないからこそ、ボディランゲージなどでなんとかして気持ちを伝えようとして、その結果とても良い心の絆を築くことができたので、今回再び札幌に来たいと思いました。

去年札幌に来た時、私はあるご夫妻の家にホームステイをさせていただきました。そのご夫妻はとても親切にしてくれて、私に何でも買ってくれました。最初の頃は、何かお返ししなければ・・・と思っていましたが、だんだん慣れてしまいました。(笑) ある日、お店で70円のアイスクリームを買った時でさえもお母さんが払ってくれました。でも、私は自分で払いたかったのでもう払おうとすると、お母さんは「あなたが自分で払うなら、私も家族の分は買わないわ!」と言って強制的に私の分のアイスクリームも一緒に買いました。

結局、私はその70円を支払いましたが、後でお母さんは100円を私の部屋に置いていきました。私はその100円を家の子どもにあげましたが・・・その家族はとても親切でしたが、私は何度もお金を支払おうと努力しても結果的に成功しませんでした。私は何かお礼をしたいと思い、今は週に一度その家を訪れ、英語を教えています。お母さんはその帰りのチケット代まで出そうとするので、今も自分で支払う事に苦労しています。(笑)

今日はどうもありがとうございました。

ジョナサン シェパード (アメリカ) 札幌市教委 ALT (男性)

みなさま、こんにちは。ジョナサン・シェパードです。現在、札幌の中学校で教師をしています。私はアメリカの友人とよく電話で話をしますが、その際によく聞かれる事は、札幌とアメリカの大きな違いは何ですか?ということ。文化の違いということに関して、私の頭の中に思い浮かぶことがいくつかあります。一つは、アメリカでは、英語を話さない外国人に対しては、アメリカ人はとても冷たいです。しかし、逆に日本では日本語を話さない外国人に対して、日本人はとても親切に接し理解しようとしてくれるということです。もう一つは、私は温泉が大好きなのですが時々温泉に行くと、小さい子どもたちは私の事を不思議そうに見ます。特に浴槽の中では私の体をよく見て、なるほど～!というような顔をしています。(笑) そういう部分では日本に住んでみて初めて、自分は日本人とは違うんだ、と逆に感じさせられるところがあります。世界のいろんな国で、異文化の中で、周りの人が自分の事をどのように見ているのかを自分で認識できるという事は非常に大切だと思います。また頭に柔軟性を持つという事(違う文化・習慣・人を見て、受け入れる事)は、非常に重要な才能です。その才能がない場合は、非常に自己中心でわがままな行動に出ることになると思います。フレキシブルな考え方ができない人は、直接自分が見た事物だけを信じ、その背後にある深い意味などを理解する事ができないのです。確かに国によって文化の違いはいろいろあります。でも、人間としての考え方は、根本的にはまったく同じだと思うのです。ありがとうございました。

ベンジャミン サリバン (アメリカ) UMASS からの北大留学生 (男性) **クラーク博士の6代目の孫**

みなさん、こんにちは。ベンジャミン・サリバンと申します。マサチューセッツ州立大学から参りました。北大の留学生として、日本語と日本文化の勉強をしています。皆さんは、アメリカで有名な「空手キッズ」という映画をご存知でしょうか。ニュージャージー州の一人の男の子の話で、引越によりいじめを受けるのですが、そこで「ミヤギ」という日本人の男性と出会います。その男性は盆栽の庭師を職業とし、空手もマスターしている人でもあります。この日系の男性は典型的な日本のおじさんとは違うタイプですが、多くのアメリカの子どもたちはこの「ミヤギ」という日本人を通して多くの影響を受けたと思います。

「国際交流」というのは、自国の文化に対する固定観念に固執することなく、自分の国以外の勉強をして、視野を広げられる素晴らしいプログラムだと思います。

札幌に来てからいろいろなプログラムに参加しています。また、札幌に住み始めてから自分の視野も大きく広がっている事を実感しています。現在の私の日本人の友人は誰一人として空手はやっていません。また、自分は盆栽にとっても興味がありますが、周りで盆栽を趣味としている人がいないので、どなたか一緒にやってくださる方はいらっしゃいますか？

自分が知っていると思っていた事でも、実際に経験してみると全く違っていたという事もあるので、まずは何でも実際に経験してみる、ということがとても大切だと思います。

私が北海道で特に学んだことがあります。私は、日本人は勤勉でよく働くという固いイメージだけだったのですが、実際に日本人に接してみて、穏やかで柔軟な考え方の人も多いことがわかりました。こういうことも含めて、今は、毎日日本人と日本の文化に接しながら生活している事に対し非常に喜びを感じています。

今日はどうもありがとうございました。

マイケル ヘイズ (カナダ) 札幌市教委 ALT (男性)

みなさん、こんにちは。マイケル・ヘイズです。私も2回目です。またお会いできてうれしいです。日本に来て16ヶ月が経ちました。現在、清田の高校で英語を教えています。私はカナダ出身ですが、カナダはとても大きな国です。私の曾祖父母はヨーロッパ出身なので、私もヨーロッパ(フランス)にも何年か住んだことがあります。ですから、カナダとフランスの両方が自分にとって祖国だと思っています。その他にまだまだいろいろな国に住んでみたいと思い、今は日本に住んでいます。札幌は3番目の故郷のような気がします。今回また新しい方にお会いしましたが、100年後にはどのくらい国際交流が広がっていくのかと考えると、今からとても楽しみです。今日はどうもありがとうございました。



姉妹校流ニュース・・・七飯町とコンコード町

マサチューセッツ州コンコードを訪問して

今年度も、七飯町中高生海外交流研修が実施されることとなり、私も職員の一人として中高生 7 名、教員 1 名、一般参加者 1 名、町関係者 3 名と共に 10 月 10 日（月）より 11 日間にわたる研修をさせていただきましたので、コンコードとの交流や今後のあり方について感じたことを記載させていただきます。

今回のコンコード訪問は北海道とマサチューセッツ州との 15 周年記念式典への出席も盛り込まれており、国際交流の観点から有意義なものでありました。特に、滝川市の国際交流協会の一行や北海道マサチューセッツ州訪問団一行とお話することができ、非常に参考となりました。また、この度の研修目的として一般町民については人的・文化的・習慣的交流を中心とし、中高生については初めてのアメリカ体験であり、生活文化習慣の違いを直接体験し姉妹提携している学校に通学することにより、生徒の視線から体験することだろうと考えている。

10月10日函館空港へ海外研修に胸を膨らませた中高生と町民代表が集まりました。空港では林教育長の生徒に対する研修の意味を込めた見送りの言葉をいただき羽田・成田を経由し、まず、ニューアーク空港へ向かいました。生徒たちは初めてのホームステイ週間に不安を抱いているのか、期待に胸を弾ませているのか、何かしら口数が少なかったように感じられました。13時間の長い空路も短く感じられ、ニューアークに到着、即ボストン行きへ乗り換えと思ったらアクシデント！・・・5時間待たされました。その間、生徒たちは初めての外国の空港内でドル紙幣やトラベラーズチェックを使い買い物や食事をとり、私が心配することなく何かしらのびのびと行動していて安心しました。このアクシデントが一週間のホームステイの良い訓練になったかなあと感じました。

しかし、ボストンで私たちを待っていてくれるホストファミリーのことを考えると落ち着かず心配しておりましたが、ボストンでは熱烈な出迎えの歓迎を受け、それぞれホストファミリーへ紹介をして夜も遅かったので早速コンコードへ向かいました。私は、Junko-Kargula さん宅で日本語が話せますので英語が話せない私にとっては安心でした。夜のボストンそしてコンコードと景色は見えませんが車の中からは、樹木が多く、七飯町でいうと大沼地区の別荘分譲地の中を走っているような気がしました。

大きなジュンコさんの家に着いたときはもう夜も遅くなり、夫のマイケルさんは寝ていました。私たちの訪問にあわせて、日本食の寿司などを用意していただきましたが、気遣っていただき朝食としていただくこととし、日本から持参したお土産等をお渡しし、眠りにつくこととしました。

私たち大人グループは北海道マサチューセッツ州 15 周年式典のほかにタウンハウスやウィラード小学校等の姉妹校の公式訪問が始まりましたが、子供たちの様子については、岡崎さんが世話役のバートンと常時電話で様子を確認していたので一安心しとりました。

私たちの訪問にあわせて、様々な準備をしてくれた Curtin 夫婦、ジュンコさん、Emily さん他、関係者の皆さんには大変な負担だったろうと想像します。この交流を長続きさせるためにも検討する課題がたくさんあるように思え後日、所管課に項目別に報告したいと考えております。

コンコード町最後の夜、ポットラックパーティには元気な生徒の様子も再確認でき私としてはほ

っとしましたし、こんなにも沢山の方たちが私たちの訪問にあわせ、心温まる準備をしてくれたのだと考えると、胸の奥が熱くなるのを抑えることができませんでした。

翌日のお別れは一週間の滞在でしたが、つらいものがありお世話してくださった方たちに心から感謝し、ボストン・ニューヨークと向かいました。生徒たちも緊張した一週間から開放されたせいか、やっと生徒らしい元気が出てきたように思えました。

ボストン・ニューヨークでの視察は大変良く計画されておりましたが、生徒の気持ちと一般参加の大人の考えには多少の温度差があったように思え、翌年は事前研修時に現地情報の共有化を図ることが必要だと感じました。私たち生徒を含めた派遣された方たち全員が何事もなく元気で帰国できたことに感謝するとともに、これからもコンコード町の町民の皆さんと兄弟のような親しい交流が末永く続くことを祈念しながら報告とさせていただきます。

(七飯町コンコード親善交流訪問団団長 村瀬 克己・七飯町農林水産課長)



姉妹校流ニュース・・・滝川市とスプリングフィールド市

〔社〕滝川国際交流協会主催 第15回ジュニア大使訪問団派遣事業について

滝川市では、(社)滝川国際交流協会との共催で、姉妹都市であるスプリングフィールド市(ス市)にジュニア大使訪問団を毎年派遣しておりますが、今年も10月11日より10日間の日程で、前田国際交流協会会長を団長に7名の大使を派遣致しました。

本年は北海道・マサチューセッツ州姉妹提携15周年という記念すべき年であったことから、一行はボストンの公式セレモニーに参加させて頂きました。班長の前川さん（滝川高校1年）は「このような公式行事は、映画やテレビなどでしか見たことがなく、通常では味わうことができない経験となりました。」と話していました。

この貴重な経験を皮切りに、当市で現在進めている難病を抱える子ども達の受入施設である「そらぶちキッズキャンプ」のモデル「ホール・イン・ザ・ウォール・ギャング・キャンプ」（俳優のポール・ニューマンが推進している）を訪問し、感動と共感を覚える一方、ニューヨーク（NY）では、きらびやかなマンハッタンの街並みやミュージカルはもちろんですが、独立行政法人国際交流基金のニューヨーク事務所にお伺いし、NYで働く方達の生の声を聞かせて頂き、将来の進路選択に好影響を与えて頂きました。

しかしながら、何と言っても大使の心に残ったのはス市での5泊に上るホームステイであり、滝川西高等学校の姉妹校であるスプリングフィールド工科高等学校の授業等に参加したことだったようです。工科高校では、ホストシスターやホストブラザーと共に同じ授業に参加し、与えられた日本を紹介する場面では、日本の「学級担任制」、生徒全員が同じメニューを教室で食べる「学校給食」などを紹介。米国人生徒に驚かれる一方で、自分達の文化の特色に気づくことになりました。

また、ホームステイでは、言葉が通じないながらも、お互いが一生懸命に理解しようとした結果、言葉を越えた友情が育まれ、出発当日は、皆が号泣するというかつてない光景が見られました。

地域の将来を担う若者が、このように言葉や文化の壁を越えて、心の絆をしっかりと築き上げ、新たな一步を踏み出したことは大きな財産であり、今後もこれまで以上に姉妹都市関係を堅持、活性化して参りたいと考えております。（滝川市総務部秘書課交流推進グループ）



事務局短信

鈴木庸一氏 在ボストン総領事に就任

在ボストン日本総領事館の新総領事として鈴木庸一氏が決まりました。氏は、外務省経済局審議官を経て9月2日付発令、10月初旬に着任されました。また、西林万寿夫前総領事は在サンパウロ日本国総領事館総領事として転出されました。

今年の10月の北海道・マサチューセッツ州姉妹提携15周年記念事業の北海道PR・絵画書道展や州庁舎セレモニー・レセプション、さらに経済ミッション関係などに関しては、高島正幸首席領事をはじめ、大久保徹経済担当領事、関川勇三広報文化担当領事、同じく広報文化担当のスーザン・ギル氏などのご尽力をいただいておりますことをここに特記して、感謝申し上げます。

寄贈図書のご紹介—最近、当協会が寄贈を受けたものです—

□ 「Creating the Sapporo Snow Festival Sculptures」

(雪像の誕生—「さっぽろ雪まつり」の舞台裏—)

毎年200万人もの人々が雪祭り会場を訪れますが、大雪像がどのように計画され、造られるかはほとんど知られていません。この本では、『さっぽろ雪まつり』の雪像が、どのようにして造られるか、そのプロセスが豊富なカラー写真と英文で解説されています。外国人へのプレゼントとして最適と思われるすばらしい本です。(36頁・英文・別冊和訳付きセット価格1,300円)

著者：サリー 小林氏 (TEL/FAX011-573-6525)

□ 「The Greatest Legacy」 (内村鑑三著「後世への最大遺物」の英訳本)

当協会会員の山城 俊昭氏がこの度、上記英訳本を出版されました。著者が若き日に感銘を受けた同書を、退職後思い切って、米国の長年のペンパルのために英訳されたものということです。

今回、マ州訪問団に託されましたので、マサチューセッツ州知事と州立大学長に贈呈して参りました。(228頁・定価1,890円・柏艚社刊) 著者：山城 俊昭氏 (TEL/FAX011-386-2950)

□ 「遠くメコンを想う」—JICA シニアボランティアとして暮らしたラオスでの二年間—

JICA(国際協力事業団、現国際協力機構)のシニア海外ボランティアとして、1999年4月から2001年4月までラオスの首都ビエンチャンで「業務調査員」という仕事で勤務された68歳からの2年間の貴重な体験を手記としてまとめられたものです。(66頁、非売品)

著者(前北海道・マサチューセッツ協会事務局長)：山下 健一氏 (TEL/FAX 011-373-3732)

シューズベリー高校が北海道の高校との交流プログラムを希望しています！！

この度の「2005年マサチューセッツ州訪問団」の旅行中、マ州中部(ボストンから西へ56km)シューズベリー町(人口31,000人)にあるシューズベリー高校(生徒数1,400人)交流プログラム担当者のマイケル・アーバン先生から、ぜひ北海道の高校との交流を希望したいというリクエストがありましたのでご紹介いたします。今後、生徒同士のEメール交換・交換留学プログラムへの発展が期待されます。このプログラムに関心をお持ちの方は、当協会事務局までご連絡下さい。

現在、札幌東商業高校(西義一先生担当)との生徒同士のEメール交流がスタートしています。

ホームページ・2005年版更新しました！！

「北海道・マサチューセッツ協会」のホームページ2005年版を更新しましたのでご覧ください。

URL「<http://www5.ocn.ne.jp/~homas>」です。当協会の今年度のすべて(概要)がわかります。

この「HOMAS」ニューズレターNo.46も近日中に入れる予定です。

新入会員紹介(2005年7月26日以降) <個人会員>

山城 俊昭

白金 嘉金

西山 さやか

国岡 洋亮

